佛身論とドケテズム

金山龍重

記念すべき佛誕二千五百年に際して、今更乍ら吾人は佛陀の恩德の偉大莊嚴に打たれ、驚嘆讃仰の念を禁じ得ないものがある。然し單に無條件に崇敬禮拜する一面と共に、釋尊とは如何なる人格を具へられ吾等と如何なる關係に居らるゝかを吟味し究明する一面も存在することである。古來佛教研究の大半の任務は、此の歷史上の釋尊と信仰の對象としての佛陀との關係や意義を明にすることに向けられて居る。それが佛陀傳の研究でもあれば又佛身論の解釋でもある。

佛誕の年代に關する異說はあつても、佛陀が此世に生れられ發心し修業して大覺を成就し、その八十年の生涯を通じて唯一無二の教を遺し、萬世に亘る救濟の道を完成されたことは疑ふべからざる事實である。之が卽ち古來種々なる佛身說のある中で最も普遍的に行はれ來つた佛の三身說の中の應身佛である。此の應身佛卽ち歷史上の釋尊なくしては、報身佛も法身佛も在り得ないことは勿論である。今日までの此の膨大なる佛教は何と云つても歷史的に生身を有せられたる釋尊が根本で、それから一切の法門が發展したのである。さればこそ佛誕二千五百年といふことも誠に意味が深いのである。

然るに此の歷史上の釋尊と云つても、その眞相を握むことは甚だ困難で、既に佛陀の傳記に關するものが多樣であり

豊富である上に、その本質内容が果して何處まで歴史上の事實であつたかは判然として居らないのである。即ち釋尊の一生が多くの神話的傳説によつて修飾されて、普通の人間とは異る超人として神人として神聖化されて居るのである。之は佛傳に特に關係深き經典例へば、佛所行讃經や普曜經や本行集經や大事經やその他を繙けば明瞭である通りその托胎降臨の緣起より三十二相八十種好の佛陀の金身の特に圓滿最勝を表示せる點等は、人間釋迦が結局單なる人間に非ざることを物語るものである。之は結局信者の眼に映じ心に殘りし釋尊の面影を、尊崇渴仰の立場から更らに美化せるものたるは言を俟たぬのである。即ち佛傳記者が古來存在せる神話及び民間信仰等にその材料を取り、其等をも利用して佛陀を莊嚴に描寫することに努めたるものと思はれるのである。

即ち佛陀の金色身が日月の如く四方に光明を放つたとする樣な事や、佛陀は太陽と同じく世界の光であるといふ描寫等は古來のミトラ神やビシヌ神アグニ神等の崇拜が、佛陀の神話化の中に導入されしと見得るもので斯樣な例は多いのである。其故にフランスのセナール E, sénart や、オランダのケルン H. kern の如き佛教學者すらも、佛陀傳は太陽神話の發展せるものとの見解を强調して、學界に問題を惹起したこともあつた。尤もジョン、トーマス E. j. thomas なども云ふ如く是はセナールやケルンが釋尊の存在までも否定したのではなくて彼等はその神話化の大なる點に着眼したのである。

一體歐州の初期の佛教研究はビュルヌーフ E. burnouf の法華經のフランス譯の如きを初めとして大乘經典の研究より着手せるものが多く、中には深遠なる大乘教理を充分に理解せざる結果、報身佛、法身佛等の意義も確めずに是等を

も神話化の一形式と見做したるものもある。勿論佛傳の神話的修飾化といふことは小乘經典にも多く見らるゝ所であるから神話化の問題は大小乘の兩方に通じて表はれて居る。　釋尊の入滅に際して萬民の悲歎の如何に深大であり、又佛滅後釋尊を追慕することの如何に强烈なりしかも推測され、是等の原因が古來の傳說や說話とも結び付ける佛陀を神話的人格に一層高めて居るけれども、是は主として釋尊の歷史的人格に對する副次的の附加物であり莊嚴化であつて、宗教的對象としての佛陀の本質性、救濟能力に關する可能性を主として顯示したるものではない。從つて後代に至つて本體論の發展と連關して佛陀たる性能資格の無限大の擴充が行はれ、佛身論が盛に論議せられ考究せらるゝと共に劫久不變とも見るべき佛格が定めらるゝに至り卽ち法身佛、報身佛等の思想が表はるゝに至つた。

翻つて考へると教祖の人格を神聖化し人間以上と見做すことは、獨り佛教に限らず、所謂創唱教に於ては共通のことであるが、特にキリスト教の場合と比較して見ることは佛身觀の上に役立ち得る點も多いかと思ふ。

ドケテズム Docetism 卽ち基督幻影說は何故に起つたかと云ふに、之は大半はキリストの歷史的事實の不鮮明といふことに起因して居る。キリストが傳道に乘出す少し前迄卽ちキリストが三十歲近くになるまでの彼の傳記は殆ど判明して居ない。勿論その後傳道し福音を述べたる二三年の事跡は四福音書等に表はれて居るけれども、之は僅な年月のことで果してイエスといふ後年考へられて居る樣な歷史的人格が存在してあつたか何うかが先づ疑はれて居る。玆に詳說するまでもなくキリストと云ふのはイエスの尊號で救世主を意味し、それが數百年或はそれ以上に亘りユダヤ國民が、政治的並びに精神的の救世主を待望せる彼等のメシヤ卽ち救世主に向けらるべかりしものである。イエスが選ばれし神の

獨り子たるの自覺を以て傳道に從事したけれども、此世の權威に目盲ひたる祭司や代官等は、エルサレムの神殿に上り來れるキリストを以て單なる思想界信仰界の攪亂者としてのみ彼を見て眞に彼等の救主とは認めなかつた。彼等はイエスを捕へて荊冠を戴かせ罵り侮辱して罪人として刑場に送つたのである。キリストの十二使徒の弟子達が師の十字架に掛けられんとするのを見て皆逃げ去り、刑場まで行つたのは僅に聖母マリヤ及びマグダラのマリヤ等數名の婦人達に過ぎなかつた。彼女等は處刑後七日目にキリストの屍を安置せる洞窟に到れる時、キリストの屍が消失したのを見、更らに其所に立てる天使の御告げによつてキリストは復活し、且つ天に昇げられしを知つたのである。逃げ去りし弟子達も此のことを聞いて、平素の師の偉大さにより見て簡單に刑場の露と消ゆべき人格に非ざることを思ひ、矢張りキリストの復活並びに昇天は間違なき事實と信じたので、茲にキリスト教が眞に宗教として實際的活動に入るべき第一歩が開かれたのである。

然し是等の傳記の暗示する如くキリストの屍は死後七日以内に以前の場所に無くなつて居たといふのは、何者かによつて盜まれ運び去られたのでないとすれば、ドケテズムの論者の云ふ如くキリストは普通の人間には非ずして天上のもので、單に幻影の如き一時的表現體に過ぎなかつたのが、再び天上に歸つたといふ考へ方も生ずるわけである。勿論斯くの如きキリストの屍の有無のみが、ドケテズムの主張を惹起したのではなく、キリストの救主としての資格性質能力等に關する論究が複雜なる基督論を導き出したる狀態は、恰も佛教に於ける佛身論の發展と軌を同じくするものである。勿論その內容や行き方には相違も多い。基督幻影說には色々違つた意味や解譯もあるが、主としてグノーシス教派の哲

學的宗教觀の中から表はれて居る。特にマルション Marcion の說が最も極端で、彼はキリストの肉身的存在を全部否定して居る。グノーシス教派のみならずマニ教派等の中からも多くのドケテストを出した。彼等の此の考は正統基督教派からは異端邪說として却けられて居り、幻影說と屍體盜難說との困難を緩和するのは、今日まで正統信仰として一般に承認されてる復活並びに昇天の思想である。

ユダヤ國民が永き年代に亘る苦難から、その救世主を待望することの强烈さは、他に比すべきものが無かつた程であらうとは想像し得るけれど、さればとてキリスト抹殺論者の云ふ如く、キリストはユダヤ民族の救世主熱望より起れる空想的產物なりとすることは餘りにも暴論で到底世人の首肯を許さない所である。之よりは餘程緩和されてるドケテズムは、キリストの歷史的事蹟は認めるが、それはキリストが普通人間として此世に存在したのではなくして、天界より遣はされたる假の姿として一時的に存在した幻影であつたと主張するのである。キリストの歷史的事實、特に傳道以前の彼の實際生活に關する記錄が甚だ少いことは、基督幻影論者に一つの論據を與へる樣ではあるが、四福音書の記者達が僅な年月に關する記錄とは云へ、最も貴重なるものを殘したことが、要するに基督教をもつて今日あらしめた所以でキリスト無くして福音書は存在し得ないから、キリストの歷史的人格を否定することは出來ない。只問題はキリストの本質如何といふ點に係つて居る。

コンスタンチノープル會議に於て三位一體の原理が肯定された原因の中にも、キリストが子なる神として普通人間の實體を備へて受難の一生を辿つたことが認められたのである。彼は單なる幻影に非ずして人間としての實體を備へたも

のとして認められたから從つて幻影說は異端として卻けられたのである。その後のカルケドン會議に於ては更らに人間に神性を備へ、兩性を有して而も矛盾なきものといふ點を明瞭ならしめたのである。即ち同會議の決議に於ては、「イエス、キリストは神性に於ても亦人性に於ても完全なる存在者にして眞に神にして、眞に人たり神性に於ては父なる神と同質にして、人間性に於ては吾等と同質なり、斯く二性を備ふれども混亂することなく、變化することもなく、分割することもなし」と明示して居る。而して之は主としてキリストといふ特殊の存在者にのみ與へられたる神人合一性である。

釋尊の場合もキリストの場合にも一朝一夕にその大覺を成就し救ひを完成したのではない。釋尊に數限りなき前生即ち本生譚があるのに對してキリストにも前生譚といふか、その本地が存するのである。其等は久遠の佛性、永劫の神性を表はすが之は釋尊やキリストの敎祖としての資格性質とも云ふべきものである。寧ろ有ゆる敎祖に共通な神聖化て歷史的觀點からは後世の附加物と見ざるを得ない。

キリスト敎に於ても神たるまゝの幻影としてのキリストは認めざることは前述の通りて、神より化身せる人間としてのキリストにして初めて人間の救ひに當り得るものとして居る。釋尊の場合は如何にも人間としての努力、修業によつて無上果を證され、而も此の原理はやがて萬人が釋尊と同じ道程を辿るに於ては、等しく佛たるの果を得べきことを身を以て示された處に、他に比類なき尊むべき價値と意義とが存するのである。

キリストは眞に人にて神であつたけれども、萬人が同樣であることは許されず、而もキリストは神意のまゝに人間に

化身したので、努力修業によつて神となつたのではない。此點が佛教とキリスト教の大なる差異點と云へると思ふ。一方は汎神教的神人同格的立場を取るに對して、一方は一神教的神治的立場を取るのである。釋尊はその佛身論を通じても知り得る通り人間であることをその出發點として居る。キリストは本來神であつてそれが救濟を渡さんが爲めに人間の姿となつたことを主意として居る。故にキリスト以外の人間は神と同質となることは許されない。

今茲では佛身論としても、基督論としても、充分に意を盡す餘裕が與へられて居ないから、他日を期してその不足を補ひ度いと思ふ。只何故に基督論としなかつたかといふことについて一言すれば、キリスト論の複雜なることは佛身論にも似たるものがある。此の速成の小論文にその兩者を扱ふことは徒らに困難を增すのみであるから、割合に判然たるドケテズムの問題から入つて、佛身論と直接關連する部分にのみ觸れて見たのであることを讀者幸に諒察せられたい。